

日本では得られなかったアメリカでの経験

田中紀子 (国立国際医療研究センター)

日本で生物統計学分野での博士号の学位を取得したあと、私がアメリカに出稼ぎに行こうと思い立ったのは、東京大学で特任助手を務めながら当時日本では国を挙げて取り組まれていたミレニアムプロジェクトの遺伝疫学研究をお手伝いしていた頃でした。その主な理由は、これ以上日本にいてもどうやって学んでいいのかわからなくなってきたからです。生物統計家がたくさん集まって一緒にプロジェクトを進行できるような文化が日本には知る限りありませんでした。常に共同研究者は臨床家か基礎研究者で彼らの多くは生物統計家を研究者として認めてくれません。それに加えて、まだまだ(おそらく今でも)女性研究者が冷遇される環境に嫌気がさしていました。

ほとんどすべてのものは処分するか日本に残して、1 歳になる息子だけ連れてボストンはハーバード公衆衛生大学院(HSPH)の LJ Wei 教授のところに来ました。アパートには家具一つありません。オフィスにも諸事情の手違いにより PC すら用意されていませんでした。おまけに受け入れてはくれるけれど、Wei 先生とは一緒に仕事ができないことも判明しました。息子と二人文字通り 0 (ゼロ)からのスタートでした。それでも、日本で働いていた時に感じていた絶望感はありませんでした。息子を育てるのに必死だったこともあります。それ以上に日本では得られない刺激をたくさん職場で頂いていたからだと思います。HSPH には世界中から集まってきたポストドクや私と同じような客員研究員の生物統計家やその卵が沢山いました。彼らとの他愛ないおしゃべりは、日本で味わってきたいやな思い出をすべて吹き飛ばして私に明るい未来を描かせてくれました。おそらく 3 年間で 100 人以上の老若男女の統計家に出会ったと思います。本当に感謝しています。生活の糧を得られる職はすぐには得られなかったので、その間、当時のメンターであった Ryan 先生の勧めもあり、HSPH 内で毎日いくつも開催される多彩な内容のセミナーにできる限りどんな分野のものでも参加しました。どんな分野と言ってもほとんど生物統計学分野の中でのことですが、関連する分子生物学や疫学分野のセミナーにも積極的に参加しました。講義も、参加が許されたものは聞きに行きました。世界中から著名な研究者の方が入れ替わり立ち代わりやってくるので、多い日は 1 日に 4 件くらいのセミナーをはしごしたときもあります。今となっては非常に貴重な経験をしました。

ボストンの生活費は高く、何とか稼がなければならない、そういう思いでようやく同じ大学のダナ・ファーバーがん研究所(DFCI)に職を得ました。その頃には何もなかったアパートに生活に必要なものもしっかり揃い、ハイハイしていた息子が走り回って歌を歌えるようになっていました。DFCI では、同大学の別施設であるチャニングラボで管理していた Nurses' Health Study と Health Professional Cohort の大腸がん発症例について、その予後や病気の再分類に関連する因子の探索研究を行いました。そこでは、大規模疫学研究がどのようなチームで動き、その中でどんな統計家がどういう働きをするのかということを目の当たりに学ぶことができました。しかし、渡米前からずっと続けてきた遺伝疫学研究の方法論は、ここでは血液検体を扱っていませんでしたので中断せざるを得ないこととなりました。その代り、今まで研究してきた内容を少しでも一般化して、分子疫学分野で応用できるように研究の方向性を変えることにしました。プロジェクト雇用だったので、方法論の研究を続けるには自分でグラントを獲得しなければ難しく、さらにお給料もボストンでの生活を続けるには難しい額だったので、1 年で転職を決意し、就職活動を始めました。

ある日、4 人目の HSPH でのメンターになってくれていた Huttenhower 先生のところへメールが届きました。その

送り主こそ NSABP という乳がんと大腸がんの多施設臨床試験のセンターの病理ラボのヘッドをしている Paik 先生でした。遺伝疫学分野での就職をまだあきらめきれなかった私だったので、ピッツバーグのラボに面接で呼ばれるまでは本当に就職する気もあまりなかったのですが、お会いしてみた Paik 先生とその周りのスタッフのお人柄に感銘し、さらに Paik 先生の熱い科学への思いに共感し、オファーを頂いてすぐに NSABP への就職を決めてしまいました。NSABP では本当に多くのことを学びました。Paik 先生は多くの統計家と仕事をされてきたので、私がどうやってラボスタッフと仕事をしていったらいいか、何を要求されていて何が責務なのかという実務的なことももちろんですが、キッチンでよくほかのスタッフも交えて、科学とは、そして臨床試験とは何か、世界は、未来はどうなっていくのかということ discussion させていただいたのは今となっては本当に貴重な時間だったと思っています。ラボには私と同じように単身赴任で 3 人も！子育てしている病理医や、シングルヤンママのテクニシャン、子育てがほぼ終わったベテランママ分子生物学者、私と同じ年だけど娘が大学生のプロジェクトマネージャーなどもいたので、生活に関する相談も普段から普通に職場で会話できたのも新鮮でした。何よりピッツバーグはボストンに比べても田舎で、人も街もオフィスも、今まで経験したことのないロースピードで動いていました。

帰国して、ピッツバーグのロースピードとまた比べ物にならないくらいのロースピードで日本の臨床研究の環境整備が進んでいることをすぐに実感しました。以前、江戸時代にタイムトリップしてしまった現代人の医師の話テレビドラマで放映されていたと思いますが、まさに今の私は江戸時代に来て今まで当たり前に使っていた道具が調達できず医療の提供に困った彼のようなようです。就任当初は何をどう手を付けて言ったらいいものか、暫く放心状態でした。IT スタッフも、ポスドクも、プログラマーもいない、施設で一人の生物統計家が、国の機関にいる現状を飲み込むのに時間がかかりました。今でも、放心状態に襲われることは多々ありますが、江戸時代に戻った彼を思いだして、自分にできることをコツコツ積み上げる努力をする日々です。アメリカのぬるま湯のような環境で働いていた日々を懐かしく思い、帰りたいと感じてしまうことも多いのですが、何とか欧米の生物統計家たちに提供されているような労働環境を整備するべく頑張りたいと思っています。

私は決して恵まれた研究者人生は歩んでこなかったと思います。自分の実力不足のせいで、自分がやりたかった研究も、参加したかったプロジェクトにも参加できずに色々な職場を転々としてきました。それでも、アメリカでの経験は貴重なものだし、今の私の仕事に活かすために必要なことだったと思いたいです。人生七転び八起き。今後どう転んでいくかわからない自分の人生をしばらく日本で楽しみながら、日本における生物統計学分野の発展、果ては臨床医学の発展に少しでも貢献させていただければこの上ない幸せ、と、ランドセルを背負って学校に行くようになった息子を見送りながら思う今日この頃です。